

4. 富田の神社仏閣

4-1. 日本への仏教伝来

日本の仏教のはじまりを語る時に「公伝」という言葉が用いられる。この言葉には私的な伝来とは異なった、公の国家間の伝達を重視する意味があると思われる。

「公伝」の記録のうち、『日本書紀』は552年（欽明天皇13年）年に、百済の聖明王（聖王）が使いを遣わして仏像、経論、幡蓋を伝えたと記す。

一方、『元興寺縁起』、『上宮聖徳法王帝説』は公伝の年次を538年（宣化天皇3年）としている。現在のところ、『日本書紀』の仏教関連の記事には潤色が多く、史料的な価値は低いと考えられるため、538年説をとる見解が一般的のようです。

4-2. 富田の神社仏閣

1) 慶瑞寺(高槻市昭和台町2丁目)

寺伝によれば、694年（持統天皇8年）に、僧道昭が創建したという。当初は法相宗に属して、景瑞寺と呼ばれていたと伝えられている。

江戸時代初期には荒廃し、寺ではなく景瑞庵と呼ばれるまでになっていたが、寛文元年（1661年）頃、隠元隆琦の弟子であり、黄檗宗大本山である萬福寺創建に尽力したことで知られる普門寺の僧、龍溪性潜が入山して寺号を慶瑞寺と改め再興した。



江戸時代には、1799年（寛政10年）に発行された『摂津名所図会』で、萬福寺の末寺として栄えた慶瑞寺が観光名所として紹介されている。

境内には、後水尾法皇の歯や仏舎利を納めた聖歯塔、龍溪の木像や遺品を納めた開山堂があります。寺宝として、後水尾法皇の勅書をはじめ、後光明天皇の綸旨（りんじ）や隠元・龍溪などの真筆が伝えられています。

昭和61年に本堂から見つかった木造菩薩坐像は、8-9世紀頃の作とみられ、重要文化財に指定されています。（1989年6月12日、国の重要文化財に指定。）

木造菩薩坐像

像高57.4cm。切れ長の眼と眉、細身の体軀など、特異な作風を示す。伝来は不明であるが、1665年（寛文5年）、後水尾法皇より念持仏の「香木観音」が慶瑞寺に寄進されたことが記録に見え、それが本像にあたるものと推定されている。この像は服制から菩薩であることはわかるが、本来、観音菩薩として造立されたものかどうかは不明のため、文化財指定名称は単に「菩薩」坐像となっている。

聖歯塔

後水尾法皇は、自筆の勅書を与えるなど龍溪への信頼が特に厚かった。また法皇は龍溪の指導により禅悟の域に達し、太宗正統禅師の号を賜った。その龍溪の晩年の居所でもあるこの地には、後水尾法皇の歯や仏舎利を納めた聖歯塔が建っている。